

150年前の転換点 ④

京都大人文学研究所所長 高木 博志



京阪三条駅前にある高山彦九郎像。鎮座する下を多くの人々が行き交う—京都市東山区で14日、須藤唯哉撮影

京都の三条大橋東詰めに、座して御所を拝する、寛政期の尊王論者・高山彦九郎の銅像がある。1928(昭和3)年11月8日、昭和 大札の即位式直前、京都府向日市 還暦の年である。前年の金融恐慌、

張作霖の爆殺事件と、泥沼の戦争が始まる時代閉塞のなかで、かつての明治維新、すなわち「明治大帝」と「近代化」の起点が顕彰された。

維新の影と主役たる市民に目を



たかぎ・ひろし 1959年、大阪府生まれ。立命館大学院博士課程単位取得退学。北海道大助教授などを経て現在、京大教授。専門は日本近代史。著書に『近代天皇制と古都』(岩波書店)など。

河原町通や三条通周辺の「坂本龍馬遭難」「池田屋騒動」などの石碑は、その前から京都市教育会が建てた。戊辰戦争を戦った丹波山国隊の子孫20余名らが、維新勤王志士慰霊祭をおこない、志士の墳墓も整備された。

すでに大正期から、京都で撮影された時代物の無声映画が流行した。そして『戊辰物語』(岩波文庫)は、27年から28年に「東京日日新聞」に連載され、新撰組、彰義隊、戊辰戦争が回顧された。新撰組流の源である子母沢寛『新撰組始末記』も28年に刊行。島崎藤村『夜明け前』は、翌年から連載がはじまった。まさに幕末維新をあつか

う文学ブームが到来した。ここに明治維新を顕彰する歴史を、振り返りたい。

1867(慶応3)年12月9日の王政復古では、「神武創業」が理念にかかげられた。古代の天皇親政が理想である。しかし「明治維新」は、薩長など勝ち組のものであって、会津・仙台など負け組の賊軍にとっては、屈辱の記念碑であった。明治初年に会津藩戦死者の死体は放置され、89(明治22)年憲法発布の「大赦」で戊辰戦争賊軍の罪は許された。薩長から東北諸藩まで、はじめて天皇のもとで「臣民」として平等とみなされた。

1917(大正6)年は戊辰戦争50年にあたり、鹿児島・京都・白河(福島県)など、全国で慰霊祭がもたれた。会津藩士殉難五十年祭では、官軍も賊軍も「憂国尊王の誠」において、なんら隔たりはなかったとの祭文をあげ、復権をはかった。このころには戊辰戦争を実際に体験した世代は亡くな

り、地方においても旧藩主よりも皇室の権威が地域社会を覆ってゆく。戦争体験者の喪失と、そのリアリティーの希薄化、歴史化の状況は、現代と似ている。

かくして28年の明治維新60年を経た、戦後の68(昭和43)年の明治維新100年には、記念をめぐる「政治」が現れた。元号法制化への動きが公然化し、全国で記念行事が盛んで奈良県橿原市長は神武天皇の仮装で行進した。一方、室町幕府に抗する町衆の自治を描いた、中村錦之助主演「祇園祭」は、蟻川虎三知事が京都市政百年事業として全面的にバックアップし、大手映画社に頼らず市民の力ンパも得て上映された。

今、政府の「明治150年」関連施策推進室は、「明治の精神に学び、日本の強みを再認識すること」をうたう。しかし「近代化」には、光と影をともなう。たとえは活用される富岡製糸場・八幡製鉄所・松下村塾など世界遺産の近代化遺産には、バラ色の評価だけでなく、劣悪な労働条件やアジアを巻き込んだ戦争も含んだ、複合的な視点が必要だろう。そして近代の主役は、政財界人ではなく普通の市民であろう。|| 次回は31日

ぶんがのミカタ